

百人一首を書きましよう。

いにしへの奈良の都の八重桜

けふ九重に匂ひぬるかな

伊勢大輔

夜をこめて鳥のそら音ははかるとも

よに逢坂の関は許さじ

清少納言

今はただ思ひ絶えなむとばかりを

人づてならでいふよしもがな

左京大夫道雅

朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに

あらはれわたる瀬々の網代木

権中納言定頼

【現代語訳】

昔栄えた奈良の都の八重桜が、今日はこの九重の宮中で色美しく咲き誇っております。

【現代語訳】

夜の明けぬうちに、鳥の鳴き声を真似て関守を騙して通ろうとしたとて、函谷官の関守ならいざしらず、私との逢坂の関を通る事は許しませんよ。

【現代語訳】

今となっては、ただもう諦めますという一言だけを、せめて人づてではなく、直接逢つて言うすべがあつて欲しいのです。

【現代語訳】

夜が明けてくるころ、宇治川の川霧もところどころ途切れて、その間から瀬々に掛けられた網代木がだんだん現れてまいりました。